

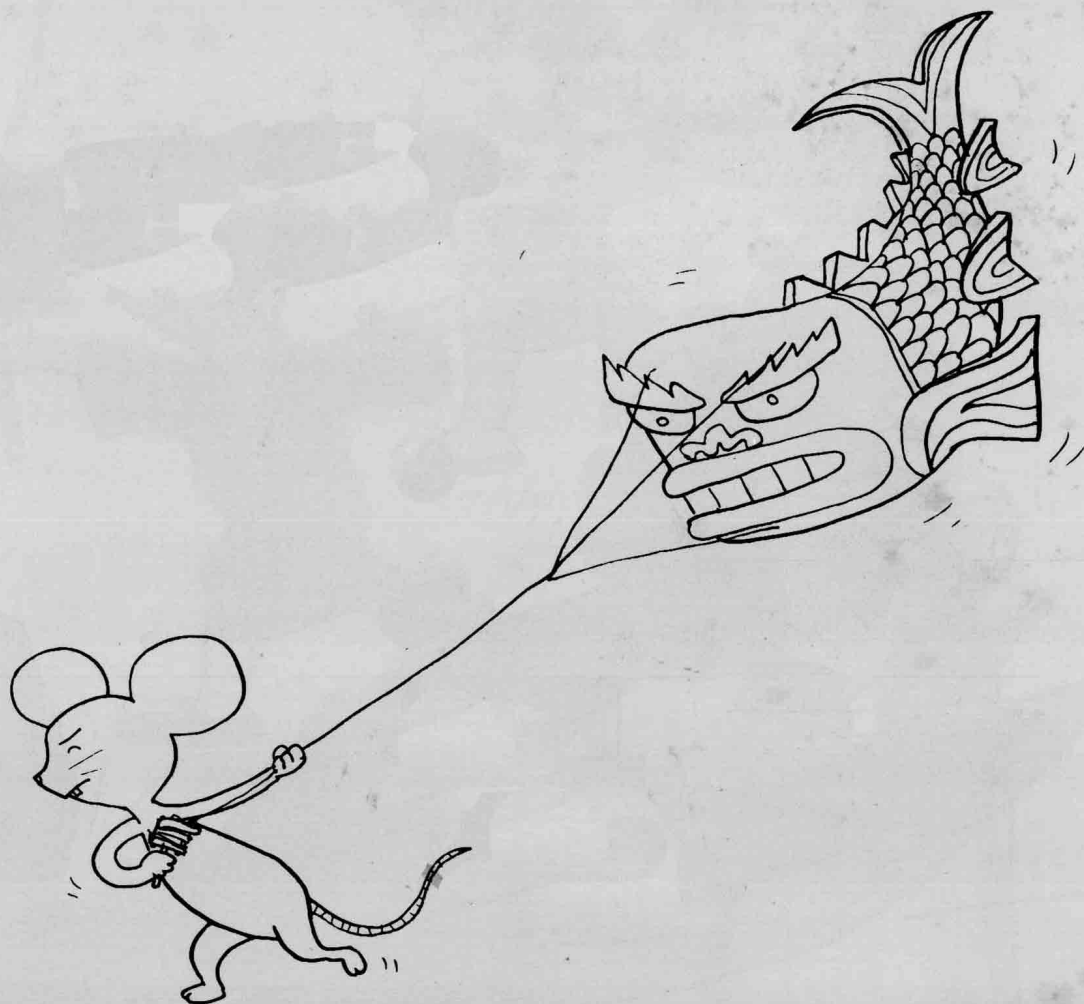
木暮正夫・文 ● ヒサクニヒコ・絵

とんだシャチホコ



とんだシヤチホコ

木暮正夫・文 ● ヒサクニヒコ・絵



ポプラ社の創作文庫

—— 小学校中学年向 ——

全30巻

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
とつて おきの水曜日	海つこの貝がら	美しい ぼくらの手	デゴイチおんちゃんの話	土ねり三ねん	山ん神と次郎	金太郎 村へかえる	ぶつかれモンタ	鳥居のサル	さよなら教室	しばてん童子	2じょう うまの3にん	名犬あらしの一生	のっぽビルのでぶくん	なくなみそつちよ
北畠八穂・作 大古尅己・絵	大野允子・作 安野光雅・絵	赤木由子・作 山中冬児・絵	大川悦生・作 那須良輔・絵	平方久直・作 北島新平・絵	大野哲郎・作 小林与志・絵	日台愛子・作 太田大八・絵	川村たかし・作 斎藤博之・絵	香川 茂・作 大古尅己・絵	菊地 正・作 油野誠一・絵	市原麟一郎・作 村上 豊・絵	北畠八穂・作 梶山孝明・絵	岡本文良・作 古賀亜十夫・絵	大石 真・作 井口文秀・絵	宮脇紀雄・作 箕田源二郎・絵
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
三つ子のおねえちゃん	みんな で五人	リヨウと6匹のねこがぞく	海からきた少女	なかまは ずれ町はずれ	まぬけなリユウの話	くじらに だかれたたこちゃん	いなくなつたヤスコ	あかい巣ばこ	ヤッコの子つこ	怪鳥ヒドラの子	いななけ春風号	さよなら泣きむしマミ	メダカの歌	学校に馬が やってきた
菊地澄子・作 石倉欣二・絵	小納 弘・作 しみず清志・絵	間所ひさこ・作 田中禎子・絵	立原えりか・作 三国よしお・絵	血海達哉・作 杉浦範茂・絵	斎藤星次・作 金沢佑光・絵	小野寺悦子・作 渡辺洋二・絵	松井英子・作 東本つね・絵	菅生 浩・作 鈴木義治・絵	安藤美紀夫・作 長谷川知子・絵	岸 武雄・作 梶山俊夫・絵	角田光男・作 かみやしん・絵	生源寺美子・作 田中禎子・絵	水上美佐雄・作 渡辺三郎・絵	植松要作・作 横内 裏・絵

ころべえの町^{まち}には

おんぼろお城^{しろ}の ゴイサギ城^{じょう}がありました。

お城はおんぼろでも 金^{きん}ピカのシャチホコが、

ぴいーんと しっほをあげて にらみあっていました。

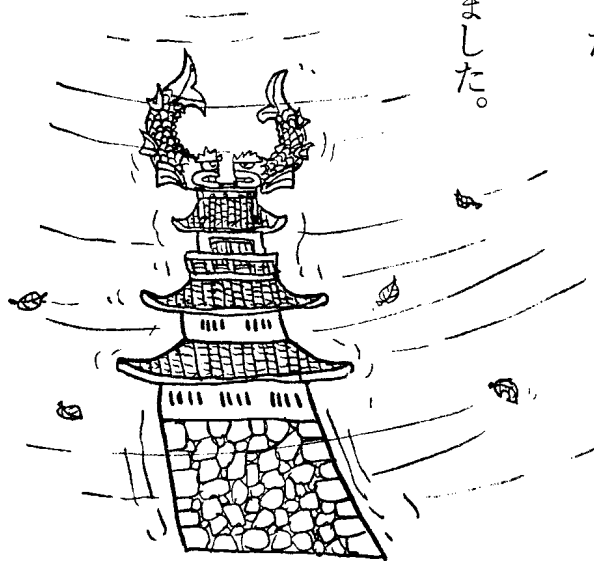
ところが ある晩^{ばん} 大あらし。

とのさま ごじまんのシャチホコが かたっほ、

ビューンと とんでいってしまいました。

「とんだことに なってしまった。」

と、とのさまは おろおろしはじめました。



おのゝさま



もくじ

①

ハチがぶんぶん ネズミがちゅう

山へいったらイノシシが……

②

どこへとんだか

金のシャチホコやーい!

27

③

山おくの 金カジカ沢で

ころべえたたちが ひろった石は

52



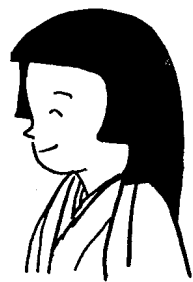
ホタテ

当



6

コンナ



大

鼻の
伝吉



チュウ助

4

お城しろのやりくりと

こめや
米屋の福八のかんけい

72

5

ころべえたちと チュウ助すけと

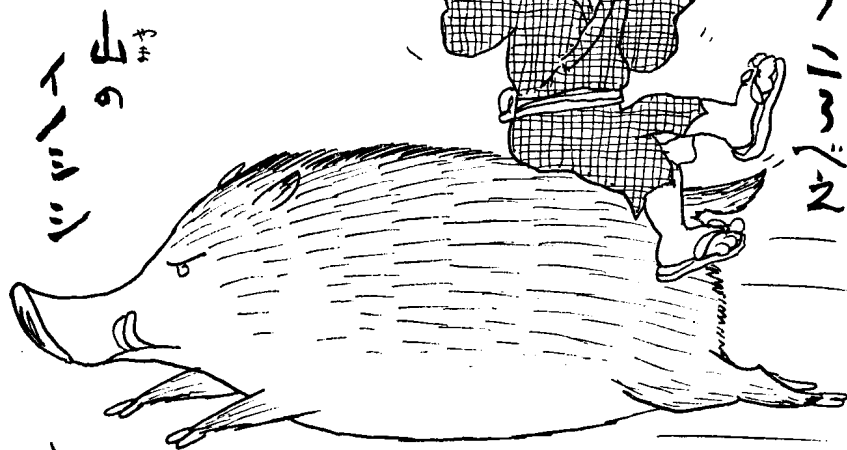
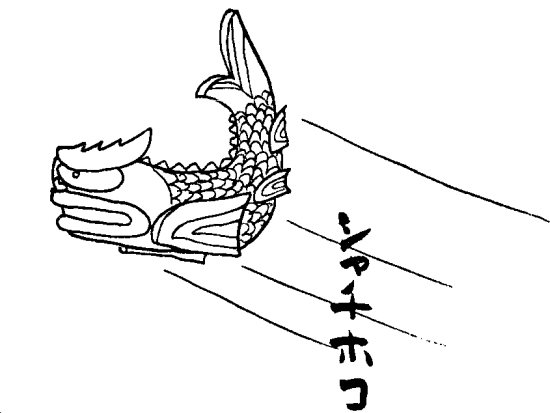
九十ぴきのネズミたち

93

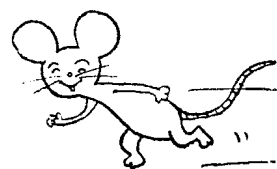
幸助 ニウ スケ

どんぐりーん

サ
ブ
太



W. Lisa



表紙絵・さし絵●ヒサコニヒコ
装丁●伊藤忠彦

☆どうわのまど☆

とんだシャチホコ

木 暮 正 夫・文

ヒサフニヒコ・絵



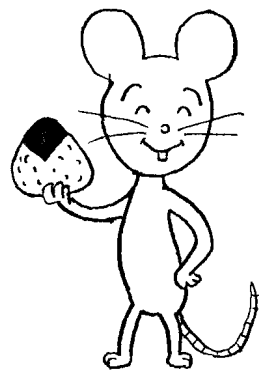
1 ハチがぶんぶん ネズミがちゅう

山へいったらイノシシが……

ずいぶんむかし。

ほうほうにお城しろがあつて、とのさまのおさめる国が、いくつにもわかれていたころのことです。たくさんたの田んぼのある大きな国もあれば、米がちよっとしかとれない、小さくてびんぼうな国もありました。

お城といつても、ピンからキリまであつて、たいそうな石がきのうえに、でんとかまえ、いく万まんのてきがせめよせてもびくともしないお城から、ふけばとぶようなひんじやくなお城まで、じつにいろいろでした。





ころべえのとうちゃん、天野^{あまの}当べえがおつかえしているとのおさまのすんでいるゴイサギ城^{じょう}などは、見かけこそいちおうお城^{しろ}らしいというだけで、ひんじやくなお城^みの見本^{ほん}のようなものでした。かべははげおちてるし、雨^{あま}もりはするし、ひどいありさまです。けれど、シャチホコだけは金^{きん}ぴかにかがやいていました。

「さて、きょうも一日、おつとめしてまいろう。」

天気^{てんき}のよい朝^{あさ}でした。当べえは、よれよれのはかまを、やぶらなようにそつとはきました。きゅう金^{きん}がすくないから、新しいはかまなど、三年に一度も買^かえません。

さむらいのたましいといわれる刀^{かたな}だって、なかみはなまぐらでした。先祖^{せんぞ}ゆずりのりっぱな刀は、どうぐ屋^やに売^うりはらって、安^{やす}ものを買ったのです。それというのも、とのさまがびんぼうしていて、きゅう金をあげてくれないせいです。

当べえは、年のころ四十ほどに見えますが、ほんとうは三十五で



した。びんぼうばかりしているので、年よりずっとふけて見えるのです。すまいは、お城から歩いて十五分のところにある、さむらい長屋ながやでした。お城がひんじやくなのだから、長屋だつてりっぱなはずがありません。やぶれだたみのおんぼろ長屋です。

当とべえは、なにごと**も**ぱつとしません。しょっちゅう、くたびれがおで、目もしょぼついています。しらかもふえてきました。毎日、べんとうをもつておつとめにいくけれど、これといったしごと

がまっているわけではありません。

草むしりをしたり、鼻毛はなげをぬいたり、あくびをしているうちに、なんとなく夕ゆうがたになって、家へかえるのです。

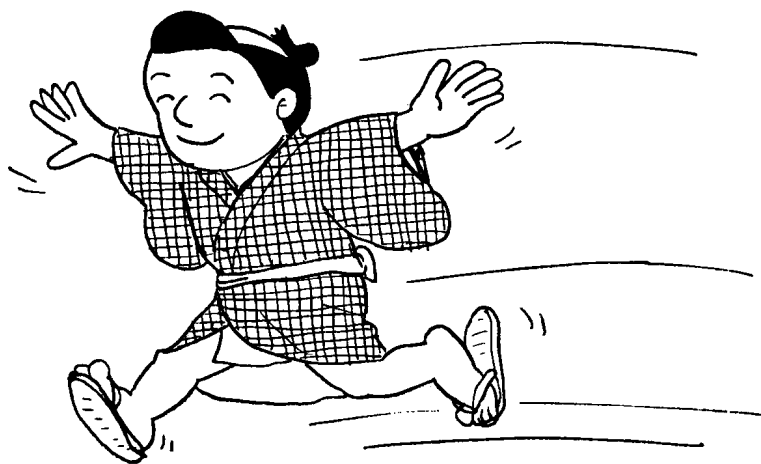
「人にはなにかひとつくらい、とりえというものがあるはずだが、当とべえほどとりえのないけらいもめずらしいのう——。」

とのさまがなげいたことがありました。

当べえもそのとおりだと思おもいました。剣けんじゅつもへたなら、口もへた。ヤリをふりまわせば、ヤリにふりまわされるし、馬にも乗のれないし、まったくさむらいらしくありません。こんなふうだから、手がらなどたてられそうになく、きゅう金きんもあがらないのです。

「せがれの十五じゅうごべえには、そうあってほしくないものだ。いまからみっちり勉強べんきょうさせて、えらくなってもらおう——。」

ところが、ころべえときたらあっちへころころ、こっちへころころ、あそんでばかりいます。さむらいの子のじゅくにはいっても、



三日めには先生やともだちとけんかして、とびだしてしまいました。それで、さむらいの子のくせに、町の子のサブ太たちとあそびまわっています。

ころべえのほんとうの名まえは、当べえよりえらくなるように、十五べえとつけられていましたが、まんまるがおに、どんぐりみたいな目をくりくりさせているので、サブ太たちからは、『どんぐりころべえ』とよばれていました。

「こんなふうじゃ、えらくはなれんだろう。親が親なんだから、し

かたあるまいが――。」

当べえはあきらめかけていました。

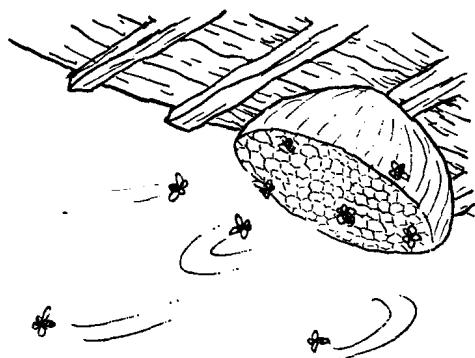
なんのとりえもない当べえでしたが、ちかごろになってやっと、ほかのさむらいにはまねのできないとりえができてきました。

天気をぴたつといいあてることです。風むきや雲のぐあいから、おおよその天気をあてる人もいますが、当べえのはそんな大ざっぱなものではありません。雨がふりだすとしたら、なん時ごろからかやむのはいつごろか、ぴったりあてるのです。

「けさも、天気を見ていくか。」

当べえは、さむらい長屋ながやののき下を見あげました。そこには、どんぶりばちほどもある、大きなハチの巣すがかかっています。ハチはいそがしそうに、巣のまわりをとんでいました。当べえは、「ぶんぶん」ととぶ、ハチの羽音はおとに耳をかたむけました。

ふつうの耳ではわかりませんが、天気がさだまっているときの



「ぶんぶん」と、天気かわるまえの「ぶんぶん」とでは、音がちがうのです。当^とべえがそれをききわけられるようになったのは、三^み月^{つき}ほどまえに耳たぶをハチにさされてからのことです。そのときのことかかったことといったらありませんでした。

「おい、十五^{じゅうご}べえ。夕^ゆがた、にわか雨があるぞ。せんたくものなど、

ぬらすなよ。さてと、かさをもっていかにゃあ。」

「えっ、こんないい天気だったのに。」

ころべえは、首をかしげました。当べえはばんがさをもつて、ゴイサギ城へでかけていきました。その朝お城にのぼったさむらいで、かさをもつていったのは、当べえひとりでした。

「ほんとかなあ……。」

当べえがでかけたあと、ころべえは朝ごはんのちゃぶだいをかたづけました。おかあちゃんはころべえが五つのときに、はやり病にかかって、死んでしまいました。それから五年たっています。ごはんたきも、茶わんあらいも、すっかりなれて、女の子にもまかせん。せんたくだってやってのけます。

ころべえはながしで茶わんをあらってから、かまの底にのこったごはんで、にぎりめしをつくりました。豆やらいもやらがまじったごはんで、にぎりにくいといったらありません。ゴイサギ城のとの